

ラッコとマナティーを連れてきた

中島将行と近藤典生

宇仁義和 (東京農業大学生物産業学部)



Introduce Sea Otters and Manatees: Nakajima Masayuki and Kondo Norio

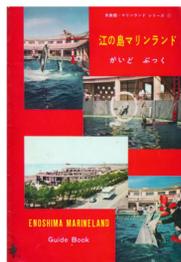
Yoshikazu Uni (Tokyo University of Agriculture)

日本の博物館の歩みは国公立館を中心に描かれてきた。動物園や水族館も同様であり、動物園では上野動物園を筆頭に公立園が主流にあり、民間施設は傍流、場合によっては娯楽目的の商業施設と見なされてきた。私立館が多くを占める水族館でも、広く知られる歴史的な記述は国主催の勲業博覧会との関係であろう。結果として、民間施設が導入した動物の来歴や導入経過は十分に記録されずにいる。このような状況下、ラッコやアマゾンマナティーの日本への初導入は例外的に著作やメディアで知られた人物が主導した。入手可能な資料の範囲で導入経過と横顔を紹介する。



国内初となる水族館でのラッコ飼育個体の到着とトラック輸送。1982年。中島氏旧蔵写真
西脇昌治と臨んだ、江ノ島マリナランドの開館に向けたアメリカでの水族館 Marinland of the Pacific 視察。1956年。中島氏旧蔵写真

中島将行



開館した江ノ島マリナランドではイルカ飼育責任者となった
紙焼きプリントは堀家邦男から入手したか？

KENYON, Karl Walton



左: ケニオン氏の紹介記事、右: 熱川バナナワニ園らしき場所への案内。1983年。中島氏旧蔵写真

日本の水族館がラッコの飼育を始めたのは周知のとおり1982年の伊豆・三津シーパラダイスに始まる。ラッコ日本初導入時の中島将行旧蔵写真に写る「ケニオン氏」とはU.S. Fish and Wildlife ServiceのKarl Walton KENYON氏であった。おそらく海生哺乳類保護法への対応などで助言や支援をしたものと思われる。

時代と世代

小川鼎三	1901	1984
古賀忠道	1903	1986
大村秀雄	1906	1993
堀家邦男	1912	1983?
西脇昌治	1915	1984
近藤典生	1915	1997
山田致知	1922	1994
中島将行	1928	2016
大隅清治	1930	2019
神谷敏郎	1930	2004
片岡照男	1931	2010
鳥羽山照夫	1935	2003

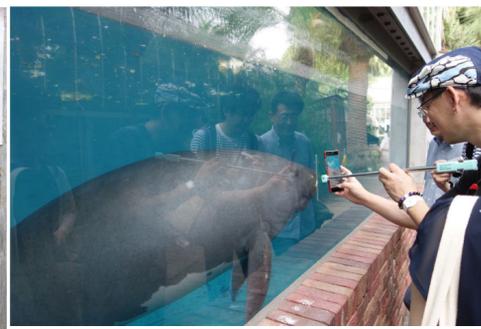
中島将行や近藤典生のようにメディアで活躍した水族館人や動物園人は少数であり、大多数の私立館園では活動の記録は少なく資料の残りが悪い。飼育動物や栽培植物の来歴情報の継承も心許ない状態にあり、貴重な遺伝子情報が不明になる事態も考えられ、研究素材の面からも情報の保存への支援が必要である。中島将行旧蔵写真や文書類は発表者が自宅で保管中であり、適切な収蔵先を求めたい。資料の閲覧や調査研究に応じます。

桜島をキリマンジャロに見立てサバンナを再現した鹿児島市平川動物公園。近藤は景観展示や接触展示ともいえる展示手法を導入した。近藤典生は、古賀忠道とは異なる動物園像を実現した数少ない人物である。

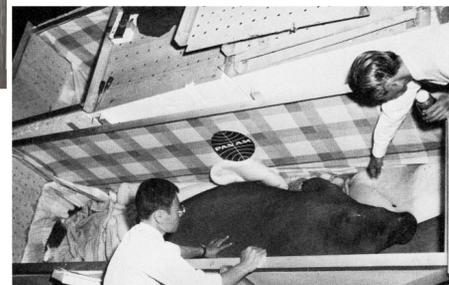
近藤典生



右手で指示する近藤典生。進化生物学研究所のアルバムからアマゾンマナティーの国内での飼育は1968年に近藤典生らがスリナムのナニメール Nanni Meer の沼地で捕獲した個体により、よみうりランドで始まった。この企画は当時の読売新聞社社主・力松太郎の要請を受けた近藤の発案という(竹内 1986)。現在、熱川バナナワニ園で飼育中のアマゾンマナティーは近藤隊が捕獲失敗に備えて確保していた個体。竹内正幸。1986。アマゾンへの旅。近藤典生教授, pp.196-197.



熱川バナナワニ園のマナティーも読売新聞が派遣した近藤典生学術研究隊が確保していた個体。



南米スリナムからマナティの空輸。1969年「近藤典生教授」(1986) 口絵写真



展示実習解説書「近藤典生と自然動物園」 3.0 MB
https://nodaiweb.university.jp/muse/kondo/nodai_kondo2015_note.pdf